



高齢化社会を乗り切るために

地域創造研究所長
愛知東邦大学 経営学部教授
御園 慎一郎



ものすごいスピードで高齢化が進んでいる。3000万人を超えた65歳以上の人口は今後も伸び続けて2042年に3900万人というピークを迎える。その後高齢者のトータル人口は減少に転じるがケアのニーズが高い75歳以上の人口割合は増加し続けると予想されている。我が国は世界の最先端に行く高齢社会なのだ。

2025年からは800万人いると言われている団塊の世代が75歳を超える。医療・介護の提供体制とその質の向上という命題は一層重要なものとなってくる。

こんな前提の上に立って、政府は、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援を目的として可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるように、住まい、医療・介護、予防、生活支援を一体的に提供されるための「地域包括ケアシステム」を構築することとしている。これは、寝たきり状態にならざるを得ない高齢者の方だけを念頭に置いたものではない。外出、徘徊の結果として行方不明となってしまっている高齢者が既に一万を超えていると言われている認知症のお年寄りを地域で支えていくという観点からも早急に対応していかなければならないものだといえよう。

この「地域包括ケアシステム」を地域に導入していくにはたくさんの地域の皆さんの連携が求められる。医療面から見ると、かかりつけ医である診療所と入院などの重篤時の対応が求められる地域の中核病院、さらに口腔医療という観点からの歯科医の方々の連携が求められてい

る。また、このような医療の面を担当される方と福祉施設などに入所されて、あるいは在宅で介護を受けている高齢者のケアを担当されている看護師、ケアマネ、ヘルパーなどの関係者の皆さんとの連携も欠かせない。このような医療間連携や医療・介護連携を中心に様々な地域の方々がこのシステムの中で連携を取り地域で高齢者の生活を支えていく仕組みを構築しなければならない。

このためには、それぞれの高齢者についての医療・介護、生活などの情報を必要な時に、必要とする人が、必要なものを手にして良質なサービス対応ができる体制を作ることが不可欠。そして、そのための道具立てとしてのICTの技術も格段に進歩している。「地域包括ケアシステム」構築の第一歩はICTの通信情報技術を活用して高齢者に関する医療・介護の情報連携のためのネットワークシステムを地域の関係者の合意の上で導入することが第一歩だ。その連携システムで共有できたデータを活用してそれぞれの関係者がサービスの質を高めさらに連携を深めて地域で支える体制を強化していくことが地域包括なのだ。

我が国社会を俯瞰すると、人口が横ばいで75歳以上人口が急増する大都市部、75歳以上人口の増加は緩やかだが人口は減少する町村部等、高齢化の進展状況には大きな地域差がある。地域包括ケアシステムを、地域の特性を十分に考慮できる地域のみなさんが、他人任せにすることなく、自主的、主体的に地域の知恵を絞って作り上げていくことで高齢化社会を乗り切るための道が開けてくるものと考えている。

CONTENTS

【巻頭言】	「高齢化社会を乗り切るために」 御園慎一郎……………1
【部会報告】	「地域の子ども、心の発達支援研究部会の活動について」 肥田幸子……………2
	「健康教室(ふまねっと運動)を開催して」 澤田節子……………2
【定例研究会報告】	「ならぬことはならぬ～江戸時代後期の教育を中心として～」 古市久子……………3
【中部産業史研究部会 定例研究会報告】	「2月14日(土)は、下出シンポジウム開催」 寺島雅隆……………4
【地域減災研究会報告】	「減災研究会報告」 御園慎一郎……………5
【冬の公演会報告】	「『地球のステージⅢ+震災編』～果てなき回帰～」 宗貞秀紀……………6
【書籍紹介】	地域創造研究所の近著2冊……………7
【寄稿】	「地域調査について」 井上秀次郎……………7
【地域の話】	「新校舎L棟完成『愛知東邦大学におけるラーニングcommons』」 西弘美……………8
【地域創造研究所 2014年度の主な活動】	……………8

地域の子ども、心の発達支援研究部会の活動について

地域の子ども、心の発達支援研究部会主査
愛知東邦大学 人間学部准教授
肥田 幸子

近年、子どものこころの発達支援に関する研究は重要性を増し、その成果がおおいに期待されている。ことに、地域密着型の支援、つまりそれぞれの地域におけるニーズと可能性を探り、活動の基盤を作る研究は急務であるといえる。本研究会は地域における子どものメンタルヘルス支援の実践から生まれた新たな方法や視点の開発を目的とする。

構成員は主に東海を中心とする地域において、子どものメンタルヘルス支援をしている実践家たちである。研究会会員たちが活動している場は、小、中学校のスクールカウンセリング、大学の相談室、医療機関の心理士、市の子ども支援機関、保育所などそれぞれである。

立場は多様であるが、現代の子どもが置かれている状況やそこから生まれる諸々の問題には共通のものがある。不登校・ひきこもり・発達障害・児童虐待・神経症の問題などは個別の子どもの抱える問題であるが、現代社会が抱える大きな共通項でもある。このような現状の中で会員たち

は、それぞれが抱えるケースの問題点やそれに対応できる新たな知見を模索している。一人の実践家の対応には限界があるが、知のネットワークを形成することによって、それぞれをエンパワーメントすることは可能である。

本年度の活動としては、地域で子ども臨床に携わる研究者・臨床家たちが各々のケースを発表し、若林慎一郎先生にスーパーヴィジョンを受けた。また、研究会会員相互の現状報告や意見交換が行われた。スーパーバイザーである若林慎一郎先生は日本児童青年精神医学分野の重鎮であり、日本における発達障害研究の先駆けであるといえる。会員たちは若林慎一郎先生から学ぶことが多く、また相互研鑽も成果を上げている。

健康教室(ふまねっと運動)を開催して

地域の健康づくり研究部会主査
愛知東邦大学 人間学部教授
澤田 節子

本研究部会では、「ふまねっと運動」をととした健康教室を開催し、地域住民の健康づくりの輪を広げていくことを目標に研究をしています。「ふまねっと運動」とは、筋力を鍛える激しい運動ではなく、歩行機能と認知機能の改善に効果のある運動であることから、一般高齢者を対象に実地調査をしつつ運動の指導をしています。

2013年度は4人の研究員がサポーターの資格を得て、2014年4月から名東福祉会館において、月1回(第1土曜日の午後)定期的に開催し、その前後に指導計画の学習と反省会をしています。対象者は名東区内の一般高齢者(60歳台~90歳台)で、毎回40名弱(当初50名以上になったため調整)の人々が参加されています。本大学では、各研究員の演習から学生2~3名が参加し、一般高齢者に対する運動指導の体験学習をしています。

健康教室の内容は、話は少なめにして体を動かすことを中心に、ワンツースリーのステップや歌に合わせてダンス感

覚で運動しています。「ふまねっと運動」そのものは、簡単そうに思われる内容であるが、最後までステップを間違わないよう、「ねっと」を踏まないよう歩くのは、集中力・注意力を要し、ときに間違えてしまい笑いを誘うことも多くあります。しかし、運動の途中で手足の動きが止まってしまうたり、ステップを間違ってしまったとしても指摘しないで、励まし最後まで楽しくゆっくり歩いてもらうことを原則としています。

参加者からは、手足や頭を使い、声を出すことで3つの機能を同時に働かせる運動であることが実感でき、こころと体の運動効果が期待できるという声がかかります。今後、この健康教室に参加されている人々が、核となって各地域に拡がり、地域住民の健康づくりの一助となることを念じています。

ならぬことはならぬ

～江戸時代後期の教育を中心として～

名東の寺子屋研究部会主査
古市 久子

名東の寺子屋研究部会では2014年5月20日(火)18:00～19:30、A棟104教室で定例研究会を行い23名の参加を得ました。概要は次の通りです。



1 会津藩の教育

会津藩では6～10歳までを十人ほどの「什(じゅう)の仲間」とし、毎日復唱させた「什の掟」があったが、その7つの掟の最後にある一文を研究会の意志として、タイトルとした。

一年長者のいうことに背いてはなりませぬ
二年長者にはお辞儀をしなければなりませぬ
三 虚言をいうてはなりませぬ
⋮
ならぬことはならぬものです

2 水戸学の教育と学びの今日的意義—「社会につながる学び」としての再評価を中心に(山極完治)

(1) 水戸学は何を教えたかだけでなく、どのように教えたかにかんじたのか、の視点から教育と学びを再評価し、今日的意義は何かを考察した。(2) 弘道館の理念については、弘道館の成り立ち、教育理念、水戸学が重視した実学、水戸学の系譜にある渋沢栄一の「道徳経済合一説」について説明した。(3) 農民、商人の身分の違いを超えて拓れた水戸学の教育について触れ、先鋭的な15校からなる郷校教育、水戸藩の24の私塾教育についても解説した。(4) 水戸学の特色は、一、弘道館の根本理念に「文武一致」「学問事業一致」を掲げている点が端的に優れていること、二、身分や地域の壁を越え自由かつ自発的な私塾の学びに立ち、「教育の機会均等」に先鞭をつけたこと、三、自由で自発的な私塾があって、これを地域の教育基盤として郷校と弘道館が連なる地域教育が、萌芽的なものとはいえ、形作られていたことにある。

3 江戸時代後期の保険医療はどのように行われていたか(澤田節子)

(1) 水戸藩における医療活動と教育については、徳川光圀が『救民妙薬集』を編纂し、これが日本人の薬信奉に繋がった。徳川斉昭の医療政策と厚生運動では、文武両道を旨として弘道館、医学館を創設し、医療政策と厚生運動を積極的に

展開した。当時は感染症などが流行し、医学・医療の必要性を説いた。(2) 医者・教育者としての緒方洪庵の生涯と業績では、『扶氏経験遺訓』(1857年)を翻訳した。これは、ドイツのフーフェランド著、種痘の有用性・安全性が確かめられた最新の学術情報であった。また、洪庵は「適塾」における塾生の育成を行い、教育方針は、身分や階級が排除され、徹底した平等主義、個別指導が中心で、原書の予習・会読などの自習学習で、若者の人間形成の場でもあった。今日の学校教育のように細かな規則はなく、自由な雰囲気でもあった。今日の学校教育のように細かな規則はなく、自由な雰囲気でもあった。今日、明治維新前後に活躍した人々を輩出した。

4 日本人保姆第一号豊田英雄の教育に学ぶ(古市久子)

(1) 豊田英雄の生涯、(2) 幼稚園誕生の経緯と幼児教育における草創期の様子、(3) 豊田英雄の仕事内容を解説し、如何に知的で優れた人物であったか、また、当時の新聞で「頗る上品」と評した事実も紹介した。豊田英雄の生存の意味について、保姆第一号として次世代の育成、自分の悩みや体験を次へと活かし学ぶことの意味の証明、英雄の存在が水面に落ちた滴のように影響を与えた赴任の意味、フレーベルの教育を忠実に紹介しつつも創造的な保育環境を作ったことを紹介した。英雄は時代と社会の要請で必然的に絞り出された日本初の保姆であった。歴史が英雄を必要としたように、現代も新しい教育の救世主を必要としているのではないかと結んだ。

5 江戸時代の外国語事情と西洋文化流入に対する日本語(西崎有多子)

日本語は、江戸から明治の西洋文化流入時に影響を受けた。当時の西洋文化との接触と流入は現代のグローバル化と重なる。しかし、新しい概念や言葉に対して、当時は通詞、蘭学者、英学者たちが知恵を絞って新しい日本語を創りだしたが、現代ではカタカナ語のまま使われているところが違う。一方、中国では、現在でも漢字を使つての造語が続けられている。外来語の受容は、音・文字・文法・意味等のバランスの上に行われるため、外国語における方法を取り入れることには限界がある。異文化接触が起きると、その受容や拒否が起きるが、言葉も文化も互いに影響しあって現代につながっている。文化接触と言葉の変化については、言葉に対する気付きを促し、興味関心を喚起するものとして、大人だけでなく子どもにとっても興味のある教材として研究されるべき課題といえる。

2月14日(土)は、下出シンポジウム開催

中部産業史研究部会 主査
愛知東邦大学 経営学部 助教
寺島 雅隆

本研究部会は2001年に発足し、東邦学園の創設者である下出民義氏およびその長子下出義雄氏が、中部を拠点に活動した時代の経済圏を中心に研究をおこなっています。

参加メンバーは、本学の研究者をはじめ、他大学の研究者や地元の専門家等で構成されています。

研究成果として、2004年に『近代産業勃興期の中部経済』(唯学書房)、2010年に『戦時下の中部産業と東邦商業高校-下出義雄の役割』(唯学書房)、2012年に『中部における福澤桃介らの事業とその時代』(唯学書房)を発刊しました。

今年度からは、下出文庫および下出書店に焦点を合わせ、下出義雄氏および民義氏の次男下出隼吉氏を研究対象としてきました。

第一回研究会は、「下出義雄の社会科学的業績の検証-共同研究のための話題提供-」をテーマとし、森靖雄氏(地域創造研究所顧問)により、2014年7月17日(木)に本学A104教室において開催しました。

下出義雄氏の経済人としての視点以上に、社会学者としての側面に注目しました。従来は「昭和初期を代表する経済人の一人」、「東邦商業高校などの経営者」という側面における研究が中心でした。しかし、下出書店において出版物を刊行するなど、学術的貢献も豊富であることが認識できました。下出書店とは、1920年から1921年にかけて約40冊を発刊した社会科学系の出版社であり、当時は岩波書店と肩を並べる存在でした。その後、義雄氏はロンドン・スクール・オブエコノミクスに留学するなど知識人としての経験も豊富でした。また、大同工業学校の設立に関わるなど、教育の普及にも貢献しました。

第二回研究会は、「鈴木バイオリンの経営危機を救った下出義雄」をテーマとし、安保邦彦氏(地域創造研究所顧問)により、2014年8月4日(月)に本学A104教室において開催しました。

鈴木バイオリン製造株式会社は、愛知県名古屋市中川区に本社があり、創業1930年の企業です。創業者である鈴木政吉氏は日本で初めてバイオリンの量産化に成功した人物で、そのバイオリンはヨーロッパにも好評を得て、物理学者であるアルバート・アインシュタイン氏から鈴木政吉氏に感謝の手紙が届いています。

しかし、1921年を境に業績は下降線をたどり、1933年には破産申請が出され、認可されるに至りました。翌年、鈴木政吉氏の長男鈴木梅雄氏が再建に乗り出し、鈴木政吉氏と交友のあった下出義雄氏やその親友である荒川長太郎氏らの支援を受けて、増資するとともに、知多郡大府町に分工場を建設しました。この年には、下出義雄社長、鈴木梅雄専務の体制が確立し、業績は好転していきました。下出義雄氏を経営陣に据えたことにより、会社の信用が増したことも好転の一因であったと考えられます。

本研究部会では2014年1月に鈴木バイオリンを見学し、バイオリンの製造工程や創業以来の足跡を学びました。

第三回研究会は、「下出書店に関する中間報告」をテーマとし、朝井佐智子氏(中部産業史研究部会学外研究員・愛知淑徳大講師)により、2014年12月16日(火)に本学L棟4階ホールにおいて開催しました。

下出書店において、どのような出版物が出されたのか、誰にどのような経緯で執筆を依頼したかなど、研究の中間報告が行われました。下出書店について、義雄氏と隼吉氏がどのような形で関わったかなどが、今後明らかにすべき課題です。

下出書店と並んで、「下出文庫」も注目すべき存在です。「下出文庫」は、本学のほか、東京大学にも存在しています。それらのフィールド調査もすませました。そうした報告をまとめて、第6回下出文庫シンポジウムを、2015年2月14日(土)に本学本学L棟4階ホールにおいて開催します。そこでは、安川悦子氏(元名古屋市立女子短期大学学長、日本学術会議委員)による講演もおこなわれます。テーマは、「20世紀初頭期における社会政策の動向-ドイツ・イギリス・日本-」です。加えて「下出義雄と下出書店」をテーマとしたシンポジウムも開催します。是非、お出で下さい。



減災研究会報告

地域創造研究所長
愛知東邦大学 経営学部教授
御園 慎一郎



木曾の御嶽山の突然の噴火はまだ生々しく脳裏をよぎります。秋晴れの空の下で登山を楽しみ、これから昼食をというときに起きた惨事。見舞われた方の恐怖はいかばかりだったでしょう。まして、命を奪われた方々の無念さを思うと言葉を失います。

この噴火災害のことを思うにつけても、四年前の東日本大震災の事を肝に銘じて災害に対する備えを怠ってはならないと改めて思います。とはいえ、あれから四年の月日が流れました。災害列島で生活する我々にとって大切なのは「災害に対する備えは欠かせないのだ」という認識を持つことはとても大切なことです。そしてその為には繰り返し繰り返し災害というものと向き合う時間を持つことが必要なのです。

そのことをふまえて、地域創造研究所としては、地域の皆さんが災害への対処方法をしっかり身に付けて安全に生活できる為のお手伝いをするために震災発生の二ヶ月後から震災とそれへの対応について考える研究会を定期的開催してきました。

これまでの研究会の状況

初年度は「被災地の実態から学ぶ」をテーマに選びました。

一回目は5月に災害直後に現地入りした名古屋市消防局のレスキュー隊長を講師として被災現場での救援捜索活動の実態を報告してもらい、二回目は7月に被災地支援ボランティアのNPO法人レスキューストックヤード代表から現地での悲惨な実例や精神的ケアの大切さと難しさを教えてもらいました。また、三回目は10月に愛知東邦大学と東邦高校の教職員と学生、生徒で被災地支援のボランティアに参加した皆さんの報告会を行い、四回目は一年のまとめとして2月に防災の専門家の講演と行政や地元の防災担当の皆さんでパネルディスカッションを行いました。

二年目には研究テーマを自分達が生活する地元の状況を知り災害に備えるということに重点を置き、地元名東区を対象に実施しました。

一回目の研究会は7月に名東区の地盤形成の推移やこの地域に影響のあった巨大地震の歴史、名東区地域の都市開発の歴史などを学び、その経験を前提に、二回目は11月にフィールドワークを行って、これまであまり意識していなかった地形の高低差、都市開発の際の切土、盛土による地盤の強度など防災の観点から地形をどのようにとらえるかということを学びました。

第三回は「皆で話し合い、身近な地域の防災力を高め、災害による被害を減らそう」をテーマに、ワークショップを開催し多くの学

びを得ました。

昨年度は、災害のその時にその現場で何が起こっていたのかを知るという観点から現実に被災した方から講演をしていただくことにしました。また、これまでは研究会は地域創造研究所の主催で本学の施設を中心に実施してきましたが、津島市に立地する学校法人平山学園と共同でも実施することとし三回の研究会のうち二回は津島市内で開催いたしました。

まず6月に教育の現場で何が起こったのかを知るということを中心とした「かけがえのない命を守る～大震災を体験して～」と題して宮城県女川町の女川中学の佐藤敏郎先生に本学を会場として講演をしていただきました。講演では実際に体験した人からでなければ何うことのないエピソードを聞かせていただくことができました。

二回目は10月でしたが、会場を津島に移して再び佐藤先生に登壇していただきました。佐藤先生は宮城県の防災担当主幹教諭でもあり、災害時に備えるという観点からのお話もしていただきました。

第三回は企業経営の現場では何が起こりそれをどのように乗り越えていたのかということを中心とした仙台を中心に環境関連事業を展開されている守屋隆之さんに「東日本大震災を乗り越えて学んだもの」と題して経営者の立場で震災をどう受け止めどう対処したかという話をさせていただきました。

本年度は準備の関係から二回の開催となりました。

一回目は10月に津島を会場として行いました。この研究会の狙いはメディアの側からは東日本大震災はどのようにとらえられていたのかということでした。そのため、講師は地方新聞とつながりのきわめて深い時事通信社を通じて岩手日々新聞にお願いし、自らも被災しながら震災直後から取材を続けられた伊藤稔氏にお越しいただき講演していただきました。新聞社という立場そして自ら取材したという立場からの豊富な資料と体験に基づいた幅の広い報告と示唆にとんだ見解を伺うことができました。

第二回目は防災研究の第一人者であり名古屋大学減災連携研究センター長の福和伸夫教授を講師にお招きして新装なった愛知東邦大学の新屋舎で開催することになっています。ウイットにとんだ、それでいて含蓄のある福和先生ならではのエネルギーな講演が展開されることは間違いありません。多くの皆さんに聴いてもらいたい講演の一つです。

福和先生をお招きした講演会ができるというのも減災研究会を息長く地道に展開してきた成果と言えると思っています。

このような研究会を通じて地域の皆さんの防災意識、減災感覚が研ぎすまされていくことを心から祈っています。



『地球のステージⅢ+震災編』

～果てなき回帰～

地域創造研究所 運営委員
愛知東邦大学 人間学部教授
宗貞 秀紀



音楽と映像を組み合わせた新しい公演会

一昨年10月に第2回の公演会を開催しました。この度、さる1月17日(土)本学B101号室にて標題の第3回目の公演会を開催しました。このステージは、1回から6回迄がシリーズとなっている公演会で、内容がそれぞれ異なっています。公演会にもいろいろありますが、著名人の語りでもなく、映画だけでもなく、歌手の発表会でもない。いわゆる「動画・写真・音楽・演奏・弾き語り」を組み合わせた、新しい公演ステージの組み立てとなっています。一人の医師の国際支援(震災復興支援・紛争後の子ども達の支援、貧困地域の医療支援等々)の活動ですが、まとめて整理したものを巧みに語り我々に伝えてくれる公演会です。

第1回のステージが1996年1月15日より始まったライブ的ステージは、口コミで全国の学校、PTA、人権委員会、生涯学習課、地域医療活動団体等々に拡充し、近年は年間250回におよぶ公演会ステージが行われて来ています。既に今年度に3,100回の公演会を通過し、この非営利な「コンサートステージ」は、全国津々浦々に出かけて開催されています。

演者は、宮城県名取市で精神科医を務めながら、NPO法人地球のステージ代表の桑山紀彦さんです。

あの3.11。東日本大震災に遭遇され、あれから3年と10ヶ月が過ぎ去りました。今は、二度目の大きな心の傷に遭遇されています。特に、名取市閑上地区は家屋が全壊し、900人の人々の命が奪われ壊滅的な被害を受けました。現在は、更地となった閑上地域も大地のかさ上げ作業開始が現在の姿です。復興のために喜んでよいのか、家族と住んでいた跡地が消え去ろうとしているとき、住民の多くは二度目の心の傷が刻まれようとしている時期の開催となりました。

本学の御園慎一郎地域創造研究所長より開演の挨拶を終えて、いつものようにステージのダウンライトの中でスタート致しました。

果てなき回帰

ジャワ島中部震災が2006年5月末に発生しています。

地震で壊れてしまった自分たちの学校の校舎で、子ども達は無邪気にも、ガレキを拾い集めて楽器を造り出しました。無の状態となっても子ども達は輝く瞳で夢中となった姿とその支援活動状況がジャワ回帰の中で演じられました。

パキスタン震災復興編

震災による避難民キャンプの子ども達とのサッカー大会を通じて、子ども達の心の成長が紹介されました。また、物資の配給作業のときに出合った少年のワジーム君。後日再会したワ

ジームは、震災被害に有っても大きな夢を語ってくれた。子どものためまなき明日を追いかける姿の紹介でした。

名取市・閑上地区3.11震災復興支援

国際的震災復興支援活動を展開している時期の2011年3月11日に襲ってきた東日本大震災に自ら遭遇されました。地球のステージ事務局と開院しているクリニックは、少しの浸水だけで大きな被害は有りませんでした。震災翌日から、2ヶ月間は24時間体制で被災者・避難所住民への支援活動が、無惨な被害の町並みの映像を背景として報告されました。また、震災後2ヶ月後からは、子どものPTSD(心的外傷障害)予防のための活動の取り組みも併せて紹介されました。

パレスチナ篇3

パレスチナ自治区のガザ地域の近くにラファという地域があります。そこでの活動の一コマでした。少年達と廃材打楽器ワークショップです。ガレキを利用した打楽器を楽器(ガレッキ)として活用して楽しい詩や音楽で明るさを取り戻そうと言うものです。しかし、紛争で多くのものを壊され、奪われたものにとっては再生への道のりは長い時間がかかることに気づかされたことが紹介されました。心の復興無くして前に歩けないと言うことは、心の復興にも時間がかかることを教えてくれました。

自転車日本一周篇

ステージ展開の最後はやはり我が国での出来事です。自ら高校時代から始めた自転車旅行での出会い。様々な道を通り、多くの人々のお世話になり、出会い助けられながら進めた旅。四国の「おばちゃん」こと民宿「港屋」。「気をつけていきんさいよ」。「またいつでも来てよ、待つとるけんね」と親しく声をかけてくれた人との出会いが紹介され、旅を終えた故郷では、帰りを待つ家族が有ると言う流れで、一人ではないことに気づきます。

「あの坂をのぼれば」と言う作詞作曲の歌と旅の映像が映し出される中で、静かにしずかに幕を閉じていきました。ステージ公演終了後は、演者の桑山さんと参加者との質疑応答や初めて参加された方からの感想が出され熱心なキャッチボール(やりとり)が行われました。



書籍紹介 地域創造研究所の近著2冊

地域創造研究叢書No.21

『ならぬことはならぬ—江戸時代後期の教育を中心として—』

(唯学書房 2014.3.10)

『江戸時代の教育を現代に生かす』に続く第2弾として、現代に希薄化している学びの姿勢を問い直し、現代の教育に役立てたいとの思いから、時代を超えた教育の普遍的な理念を「ならぬことはならぬ」という会津の教育から言葉を拝借してタイトルとしている。焦点をあてたのは、江戸時代の後期から明治にいたるまでである。内容は5つからなる。1. 会津の教育—いま藩校・日新館に何を学ぶか(荒川宏)、2. 水戸学の教育と学びの今日的意義—「社会につながる学び」としての再評価を中心に(山極完治)、3. 江戸時代後期の保健医療はどのように行われていたか(澤田節子)、4. 日本人幼稚園保姆第一号豊田英雄の教育に学ぶ(古市久子)、5. 江戸時代末期からの西洋文化流入と日本語における受容(西崎有多子)、である。それぞれが独立した内容であるが、どれもが教育の理念と関わっており、現代に受け継がれた教育の礎について書かれているのが興味深い。

地域創造研究叢書No.22

『学生の「力」をのばす大学教育—その試みと葛藤—』

(唯学書房 2014.11.10)

大きなパラダイムシフトを迎えている大学教育の現場において、大学ではどういった人材を、どうやって育成すべきか。発展途上である教育研究者が集い「人材育成研究部会」の立ち上げを考えメンバーを募り、2011年度より活動を開始した。本書は、大学生の「力」の育成に向け、部会メンバーの大いに模索した数年の間の記録でもある。第1部では、各専門分野における学びと人材育成について多角的な視点から論じている。第2部では、2010年度文部科学省「大学生の就業力育成支援事業」として採択された、愛知東邦大学における就業力育成プログラム「地域連携PBLを核とした就業力の育成」における各種の取り組みを、学生の「社会人力」育成のための実践例としてとりまとめた。さらに、第3部では各地域の高等教育機関における取り組みを中心に紹介・比較検討するため、本学における取り組みに加え、各地域で実際に各種の取り組みを推進している方々に執筆いただいたものである。

寄稿

地域調査について

愛知東邦大学 経営学部教授 井上 秀次郎

地域調査の契機

私が地域調査にかかわりはじめたのは1981年に長崎の大学に赴任してからである。赴任先では工学部管理工学科の経営コースに配属され、同時に地域経済研究所の主事との兼担であった。その学部では経営学を担当し、研究所では行政等からの受託研究などを行っていた。ちょうどこのころ野口祐慶応大学教授(当時)から「先端技術と地場産業」をテーマとした文部省(当時)科研費による全国調査のグループで私は九州担当をするよう依頼された。

学部のゼミでは私は研究所と科研費研究を兼ねて、主に地場産業を中心にして地元の調査を学生とやることにした。

地域調査の実際

ゼミでは「テクノポリスと地場産業調査」をテーマにとりあげた。大体のゼミの構想としては、(1)ナガサキテクノポリス圏域の工場見学を始めとした地域調査をする。(2)関連の文献や圏域内地場産業である陶磁器業界関連の新聞切り抜きなどを行う。(3)調査は圏域の経営者、従業員など地

域の人にアンケートを行う。(4)収集したアンケートは各設問ごとに年代別、男女別、職業別、地域別などに分けその回答率を表にする。(5)調査結果は報告書にまとめる。(6)調査結果について各問ごとになぜこのような結果になったのかを検討する。(7)わからないことは再度現地に行き調べ原因を明らかにしていく。(8)以上を行ったうえで各自の担当箇所を論文にまとめる。

教育と研究との融合

3年日以降も毎回地域を変え長崎の地域・地場産業をテーマにして地域調査を行ってきた。その後、京都の短大に変わったが、同じように京都や滋賀の調査を学生たちとやってきた。本学に来てからは、地域ビジネス研究所(現地域創造研究所)において有松や足助町(現豊田市)自動車関連企業、碧南市、長野売木村などの調査にかかわってきた。残念ながら学生のゼミでは、一部工場見学や名東区内の社長・店長インタビューや藤が丘地域の調査などができずにすぎない。

新校舎L棟完成 「愛知東邦大学におけるラーニングcommons」

キャンパス会議 委員
愛知東邦大学広報課 課長
西 弘美

「わあー!」新校舎L棟の最上階であるLCホールでの第一声です。新たな校舎が完成し、12月1日から様々なイベントが催され、学生たちの活用が始まりました。

新棟建築については、2009年度に実施した耐震診断から始まり、キャンパス整備第1期工事に引き続き第2期工事として計画されました。巨大地震に備えること、省エネ・節電に貢献すること、快適で地域に開かれた大学へと3つのポイントの「スマート・キャンパス化」です。

L棟は、キャンパスの中心に配置し、各校舎の機能が緩やかにつながり、効率的で有機的な教育環境を実現させ、学生が共に学ぶ共有スペースで、自律的な学習を支援し知識の創造を促し、滞在型でコミュニケーションしやすい開放的な環境づくり、多目的に活動できる見える化された愛知東邦大学におけるラーニングcommonsを展開していきます。

ラーニングcommonsの実現のために、どんなに高尚な考え方で学生に場を提供しても、使われない空間は意味がないことからうながす・活用する・持続するを実現のためのキーワードとしました。

1. うながす

①時間の概念を植え付ける

4年間の学生生活の時間軸を意識させ、目標設定をうながす。

②「こうやると、こうできる」をみせる

学科の専門分野に関する活動を行う。

2. 活用する

①他人に説明する機会を増やし、自信をつけさせる。

他人に説明するためには、調べ、分析し、まとめる作業を経た上で説明する内容を良く理解するステップを踏む。いつでもどこでもプレゼンが日常的にできる場として活用する。

②ふくらみをもたせる

・単なる就職活動スキルではなく幅広い活動ができる場を提供する。

・学生が自ら企画して学修活動の一環で発表イベントなどを行い、コミュニケーション能力・企画力・表現力を育成する。

3. 持続する

①維持させる。他人の評価による手応えを実感させる。

活動による効果や手応えを感じさせる、競争させる。

②居続ける。

くつろぎ、休憩でき、リフレッシュできる居場所をつくる。

実現のためのハードは完成しました。これからの運用で、学生たちが有意義な学生生活を送れる地域に開かれた大学として、新しい学びの可能性を生み出していきます。



地域創造研究所 2014年度の主な活動

2014年 5月 20日	第43回研究会『ならぬことはならぬ～江戸時代後期の教育を中心として』刊行記念報告 (企画:名東の寺子屋研究部会 報告:古市久子氏、山極完治氏、澤田節子氏、西崎有多子氏)
2014年 5月 20日	地域創造研究所第14回総会
2014年 10月 4日	第1回減災研究会(通算11回) / 主管:清林館高等学校(於:津島市文化会館)
2014年 11月 10日	研究所叢書No.22『学生の「力」をのばす大学教育—その試みと葛藤』刊行
2015年 1月 7日	第44回研究会『地域調査について—研究と教育との統合』(報告:井上秀次郎氏)
2015年 1月 17日	第13回講演会(公演会)『地球のステージ3～果てなき回帰～』(於:愛知東邦大学)
2015年 2月 14日	第6回下出文庫シンポジウム(於:愛知東邦大学)
2015年 2月 28日	研究所所報No.20発行
2015年 3月 7日	第2回減災研究会(通算12回) / 主管:清林館高等学校、後援:名東区(於:愛知東邦大学)
2015年 3月 11日	研究所叢書No.23『東日本大震災被災者体験記』刊行

※その他、各研究部会主催による研究会等多数

学校法人 東邦学園

愛知東邦大学 経営学部 人間学部 教育学部

東邦高等学校 普通科・商業科・美術科

所報 NO.20 2015年2月28日

発行・編集 愛知東邦大学地域創造研究所
〒465-8515
名古屋市名東区平和が丘三丁目11番地

TEL (052)782-1241 FAX (052)781-0931

URL <http://www.aichi-toho.ac.jp>

E-mail kenkyujo@aichi-toho.ac.jp